タイトル	北海学園大学人文学会記録 第7回例会 ハンセン病者の軌跡：詩で綴る桜井哲夫の生涯
著者	小林，慧子；KOBAYASHI, Keiko
引用	北海学園大学人文論集(54)：121-148
発行日	2013-03-31

第7回例会

ハンセン病者の軌跡

— 詩で綴る桜井哲夫の生涯 —

小林 慧子

はじめに

ハンセン病はかってらい、らい病、業病、天啓病などの差別的用語で呼ばれていた。これらの名称から伺われるとおり、何千年の間、洋の東西を問わず、この病は忌み嫌われ、人類の災厄、神仏の業罰として、不当な偏見差別と社会排除の処遇を受けてきた。ことにわが国においては、古來からの間違った遺伝・血統の偏見が根強かった上に、1873（明治6）年アルマウェル・ハンセンにより、らい菌の発見が伝わると、明治維新以降の近代化政策に呼応して、誇大な伝染恐怖が拡がり、さらに昭和の時代に入ると国家主義、軍国主義の影響を受けて民族浄化の思想から国家管理による絶対隔離が定着し、一層その悪しき傾向を強めた。いずれもハンセン病を科学的に正しく理解していなかったための間違いである。しかもその間違いが、偏見差別や社会排除という人権侵害そのものに直ちに結びついたところに、社会として、人間として許してはならないハンセン病問題の悲劇があった。1907（明治40）年「ライ予防二関スル件」が公布されてから、89年目の1996（平成8）年に、ようやく「らい予防法」が廃止された。この間、強制隔離や家族・郷里との絶縁、断種、墮胎など筆舌に尽くしがたい人権抑圧が続いた。

現在、全国13の国立ハンセン病療養所には、2012年5月現在、2,144人が入所しており、入所者の平均年齢は、81, 91歳である。今後10年間で入所者は半数位になるだろうと予測されている。現行の医療体制も不十分で

あり、ハンセン病療養所にとって、ここ10年が正念場であろうといわれている。一人ひとりを大切にす医療・看護・介護の充実が求められ、最後まで安心して過ごせる場であるための取り組みがいま求められている。

この隔離の里で70年間過ごしたハンセン病詩人・桜井哲夫の生涯を彼の詩と証言を基に綴ってみたい。

〈桜井哲夫のプロフィールと出会い〉

桜井哲夫、本名・長峰利造は、青森県北津軽郡鶴田町妙堂崎の裕福な、りんご農家の七男として生まれた。13歳のときハンセン病を発病、17歳で群馬県草津にある国立療養所・栗生楽泉園に入所。以来70年間療養所生活を送り、2011年12月28日、同所で逝去。87年の生涯を終えた。59歳で楽泉園の詩話会に入会、多くの詩集を出版した。29歳で失明した彼の詩作は、頭の中で記憶され推敲を重ね、その作品は介護人の代筆で文字になった。

私と桜井との出会いは、2002年札幌北一条カトリック教会に講演に来たのが始めてだった。直接間近にお会いした時、ハンセン病のもたらす後遺症の醜悪さに思わず息をのんだ。「恐ろしい病気だったのですね」という言葉がはからずも口をついて出た。彼は黙っていた。40kgに満たない小柄な体躯、声帯も冒されている為、講演は聞き取れないほどの細かい声でご自分の過去を語り始めた。聞きとりにくい部分を補って下さるのが、付き添いの栗生楽泉園の元准看護師の赤尾拓子さんだった。

翌2003年、ボランティア仲間と栗生楽泉園を訪問、桜井さんのお部屋を訪ねた。不自由舎棟の一角、6畳間に縁側のついた小さな居室で、アルバムを見せて頂き、お話を聞き、夜は皆で草津市街地にあるレストランで会食をした。その夜の哲ちゃんは大はしゃぎで皆と歓談し、楽しい一時を過ごした。時々腰をトントン叩くと出てくる珠玉の言葉、それが詩作へと繋がっているのだと感じた。

私は数年後、再度療養所を訪問、桜井さんのお部屋を訪ねた。ぽつねんと一人過ごしている姿を忘れることができない。詩作の時間だったのかも知れないが、日向ぼっこをしているその姿は、『津軽の子守唄』に描かれて

いる、孤独の極みを体現している老人の姿だった。

その後、私は大学での修士論文冒頭に彼の詩集から「天の職」を、末尾に「破戒」を挿入した。「天の職」は、「らい」を背負い生きる己が身を詠い、ハンセン病を如何に受容するかという、家族、本人の思いと苦悩が見事に表現されていた。「破戒」は、ハンセン病から目を逸らせることなく病を受容し、己自身の解放を願い、社会への啓蒙の役を担ったものだった。論文に登載したことを、彼に知らせるととても喜んでくれた。

1. ハンセン病の受容—故郷との別れ

桜井は、自分で身体がおかしいと気づいたのは小学校6年のとき。右腕に知覚麻痺。父親に言う、「中学受験は止めてくれ」と言われ尋常高等科に行く。その後青年学校に行き、身体検査で「兄か両親のどなたかを寄越してください」と言われた。本人は結果について聞かなかったが、後で聞くと学校医は「本当は警察に届けなければならないがあなたの家のこともあるから、私の目の届かないところにやってくれないか」と家の人に言った。家族は「治る見込みはないけど、そうかといって家にもおいとけない」と、弘前で昭和16年1月から10月までちょっと治療したが（ハンセン病の薬・大風子油丸薬服用）薬効無く、国立ハンセン病療養所への入所となる。

天の職

おにぎりとのし烏賊と林檎を包んだ唐草模様の紺風呂敷を
しっかりと結んでくれた
親父は掌で涙を拭い低い声で話してくれた
らいは親が望んだ病でもなく
お前が頼んだ病いでもない
らいは天が与えたお前の職だ
長い長い天の職を俺は素直に勤めてきた

呪いながら厭いながらの長い職
今朝も雪の坂道を務めるために登り続ける
終わりの日の喜びのために

2. 国立療養所栗生^{くりゅう}楽泉園への入所・患者作業

法が施行された当時の患者収容は、殆ど警察権力を持って行われ、患者や家族の訴えなどには耳をかさず、まるで罪人同様に収容されるケースが多かった。患者を収容すると同時に、ものものしい予防着姿で患家を徹底的に消毒させられるのが常だった。残された家族はたちまち世間から「らい家族」のレッテルを貼られ、嫁に行っていた娘は婚家から追い戻され、就職していた者は働き口を失い、自営業ならば店を閉じ、学校へ通う子供までが事実上の登校拒否に遭うなど、まさに村八分の苦しみに立たされたのである。療養所の入所者の多くは出自を明かさない。国の隔離絶滅政策により本籍も移され、自分の名を捨てさせられ園名を称し、故郷ではこの世に存在しない者とされた。この間、全国の療養所では、平成24年5月現在、25,550人が無念のうちに隔離の壁の中で亡くなり、引き取り手のない遺骨の63%が今も納骨堂に安置されている。「故郷は宇宙より遠い」と、ある入所者は今も語っている。

17歳の桜井は、1941(昭和16)年10月7日、療養所まで送って行くという母を振り切り弘前で別れ一人で入所した。母は字が読めず帰りを心配してのことだった。入所前から言われていた桜井哲夫の偽名で入園。「青森の療養所(松丘保養園)は近くて世間もうるさいだろうから、遠い方がいいだろう」と、生まれ故郷青森県を後に、遠く群馬県草津にある国立療養所栗生楽泉園に入所した。

3. 母の言葉は「だれも恨むな」

桜井の家系にはハンセン病を患った者がいた。父方の祖母、叔母、兄も

亡くなっている。叔母は「この病気の薬が飲みたい」と言いつつ、18歳で亡くなった。母は「お前は、薬があるだけでも幸せだよ。病院があったり。幸せなんだから、だれも恨まないように」と。明治初期には大風子油も入手できなかった。

楽泉園に入った翌年、不自由舎で看護をさせられていたとき、蚤とか虱とか、南京虫に全身を食べられ、炎症を起こしひどくなり、家がほしいと実家に言い金を出してもらい、一戸建て（6畳と4.5畳）を700円で購入した。「あれ（利造）の犠牲があつて長峰家があるんだから、カネですむことはしてあげてくれ」「その代わり病気は代わってあげられないから」と、家族のその思いは続いている。

彼が入所した国立療養所栗生楽泉園は、古くから皮膚病に効果ありといわれた草津温泉に隣接している。湯ノ沢部落在住のハンセン病患者の移転を目的に、長島愛生園（岡山）に次いで、1932（昭和7）年11月設立された我が国第2の国立療養所である。白根山を間近に仰ぐ標高1200メートルの高原に位置し、冬期間は厳しい寒気と降雪に見舞われ交通機関の発達を見なかった時代にはまさに陸の孤島であった。療養所には火葬場、納骨堂さらに監禁所も用意されていた。園内での死者は、入所者の手により火葬までもが行われていた。また、ここには悪名高い「特別病室」と称される“重監房”（事実上の監獄）が、1938（昭和13）年12月に設置され、全国から反抗的とされた者が収容されていた。1947（昭和22）年、真相が明るみになるまで獄死者（凍死・餓死）22名を出している。当時の毎日新聞には「狂死、獄死が続出、お菜はわずか梅干一つ、光なき楽泉園の内情明るみへ」と詳細な記事が掲載された。日本のアウシュビッツとも言われている。

ハンセン病療養所はいずれも開設当初から、施設運営に必要な大部分が管理作業として患者労働に依存していた。桜井は、翌日から病棟の義務看護という強制労働に否応なく従事させられた。「義務看護一日目の晩、首吊り自殺者が出て、俺は腰を抜かした。その当時病棟には電話はなく、看護婦の当直を本館まで迎えに行くんだ。長い廊下を迎えに行ったんだが本当に怖かった」。義務看護は、重症患者の食事の介助、大小便の始末、気管カ

ニューレをきれいにし、喉に入れてやる仕事など何でもやらざるを得なかった。義務看護で冬は冷たい水で物を洗ったりしているうちに、凍傷を起こしたりしているうちに次々指を無くしていった。当時の治療は週1～2回の大風子油の筋肉注射だけだった。その後、所内の印刷所で植字、活字を拾う仕事(文選)を5年位したが指の麻痺により活字がつまめなくなり、園内の綿打ち工場で2年位働く。この工場は、二人で入所者全員の寝具綿の打ち直しをする仕事だった。綿の誇りを吸い込んで喉を悪くさせ、病気を悪化させる要因にもなった。この工場では昭和34年患者作業員が作業中機械に巻き込まれ不慮の死を遂げている。

入所後間もなく日本は太平洋戦争に突入。ハンセン病は「国辱」、その患者は「非国民」と見なされ、「民族浄化」のかけ声高く「無らい県運動」は、一層強化された。入所者は急増、療養所は一層貧しく物資の欠乏、食料事情の悪化で、栄養失調、結核などで死者は続出し、火葬場の煙は絶えることがなかった。1945(昭和20)年、栗生楽泉園入所者1,313名、新たな収容者167名、死亡者138名と、死亡が入所者の10%を超えた。

告白

冬枯れの空に

粉雪を飛ばして風が吹いていた

あの朝も俺は不自由者寮の看護をしていた

真空管のラジオにスイッチをいれた

雑音の中から宣戦布告のアナウンスがガーガー流れてきた

食缶の底にへばりついた飯粒をきれいに六人の患者に分けた

茶碗一杯のご飯があったらと俺は悲しかった

ひもじさの中で聞いた宣戦布告のラジオの声

今日も冬枯れの空の彼方から俺の耳を激しく襲う

俺はあの朝一粒の飯も盲人に多く与えようとしなかった

そしてその罪を背負ってきたが

今朝たくさんのご飯が汚物缶の中へ無造作に捨てられる

4. 園内結婚・断種・人口掻爬手術

桜井には、双方の両親が決めた許婚が故郷にいた。彼女が結婚しないで困っており、「園で早く結婚するよう」勧められていた。丁度、女学校を卒業し入所したばかりの「真佐子を嫁に」と、その兄にも頼まれたところだった。真佐子の顔も分からなかった。戦後の昭和21年10月、桜井が22歳のとき園内で結婚した。多くの療養所は当時結婚しても夫婦室は無く、男は夜になると女の部屋に通うという通い婚が普通だった。それも男女数組が同居するという地獄のような夜だった。幸い栗生楽泉園では夫婦雑居はなかったと言う。

入所者は、結婚したら断種されることになっていたが、それが当たり前になっていたので桜井には抵抗はなかったという。しかし、妻は妊娠した。手術の失敗だった。実家に連絡すると母は「育ててあげるから産みなさい」と言ってくれた。しかし彼女の健康がそれを許さなかった。白血病を発症していたのだった。昭和26年3月13日金曜日、真佐子の手術が行われた。注射一本打たれ、一時間ほど後で小さな赤ちゃんが生まれた。「俺は手術に立会い、胎盤などは自分が雪の下に穴を掘って処分した」。赤ちゃんを白い布に包んで渡してくれた。妻は抱くのを拒み「しょうが無い、俺が今夜抱いて寝てあげるよ」と言い自分のベッドの中に寝かせた。真佐子は「おっぱいが出るの、ガーゼをちょうだい」と言いその手には真っ白な母乳がついていた。赤ちゃんを真理子と名付けた。「真理子は俺の腕に抱かれながら、夜の10時ころ静かに息を引き取った」。翌日、看護婦と医師が診察にみえた。先生は「子供を標本にしたいのだが」。俺は「先生、何かのためになるのでしたら」と了承した。真理子は液体の入った広口のガラスの入れ物に入れられ、病室の向こうに消えた。2年後の昭和28年12月13日金曜日、妻の真佐子も白血病のため26歳で昇天した。

真理子曼茶羅

真理子が泣いています 狭い棚の上で
真理子は療養所夫婦の間に生まれたから
六ヶ月目に手術を受け 標本室の棚の上に置かれました
二十六歳で真理子の母は死にました
盲目の父がいまも歌う子守唄はかすれてこの子には聞こえない
お腹が空いたと真理子は泣きます 怖いと言って真理子は泣きます
詩集『津軽の子守歌』を手にした保母さんが子守唄を歌ってくれました
た
若い看護婦はおっぱいをたくさん吞ませてくれました
真理子は泣きやみました
津軽の子守唄を歌う空には
菩提の華、朝鮮朝顔曼茶羅の華が開きました
赤い林檎を手にした真理子は笑っています
開いた曼茶羅の傍らで 笑った真理子は曼茶羅
空に開いた曼茶羅 真理子曼茶羅 真理子曼茶羅 真理子曼茶羅

炎

—— 鎌倉観音堂にて ——

火山列島の真ん中
群馬倉賀野は真佐子の故郷
火力発電技師を父とした真佐子は
川に生まれ、せせらぎを子守唄に成長した
工事が終わると父は川の流れとともに台湾、朝鮮へと流れていった
台湾花蓮港の女学校に入学した真佐子は北朝鮮鴨緑江の工事を半ば
に家族と別れ故郷の女学校に転校してきた
女学校を卒業した秋、真佐子は戦後間もない楽泉園の門をくぐったの
です
私の傍らに立つ結婚して間もない真佐子の瞳は
給食棟の煙突から吐き出される細くて弱い煙を離れ、勢いよく立ちの

ぼる
火葬場の煙の果てを追いかけている
食糧も治らい薬もなかった終戦当時のらい園の火葬場には煙の絶える
ことはなかった
二人の薄い布団の中にも忍び寄る明日の不安の煙が流れていた
十九歳で結婚した真佐子は二十六歳の激しく雪の降る朝、私の腕の中
からするりと抜けて消えていった
死亡診断書には白血病とあった
私は今、鎌倉観音堂の前にひざまずいている
療友の鳴らす鐘の向こうに真佐子の唄う口語と散文によるラブとエロ
スのセレナードを聞いた
浅間山は限りなく高く 空は果てしなく青かった
真佐子の唄うセレナードはいつまでも地底深く炎となって燃えたぎる
のです

故郷から姪が代筆した母の便りが届いた。許婚だったハトコが結核で亡くなったと知らせてきた。しかも妊娠4ヵ月だったという。幼馴染で毎日のように遊びに行き、ときには喧嘩をし泣かせもしたが、入所してからときどき手紙や着物を縫って送ってくれていたのだった。「俺は思わず涙がとめどなく流れた」。

5. 博学の女性の個人指導。盲人将棋では、四段の免状

桜井がものを考えるようになったのは、ここに入所して出会った女性の影響だった。ものすごい博学の人で、その人から哲学から文学まで何でも教わった。その代わり当時はまだ目が見えて元気だったので彼女のために、物を運んであげたり炭が重いとか患者作業を代わってやった。「ここで生きていくのなら、文学をやる前に人を作りなさい」と言う言葉だった。彼は書物を読み漁った。

真佐子が亡くなり、桜井の病はさらに進行した。死線をさまようほどの高熱に苦しみ、声帯と指をも失う。昭和28年、29歳で遂に失明した。戦後、ハンセン病の特効薬といわれたプロミンは黎明期にあり、その過剰投与が病気を騒がせる原因になった。失明してからは、不自由舎に移った。

失明後始めたのが将棋だった。小林茂信先生に、退屈だろうからと勧められた。誰も将棋を専門にやろうとしないからどうせやるなるちゃんをやろうと思い、名人の本を何冊か買って、テープレコーダーを購入し、将棋の本を読んでもらい熱心に取り組んだ。栗生盲人会でも頭角を表すようになった。「先生は、弱いうちは俺を負かしていたが、三年くらいやったら、逆に俺が勝って二枚落として勝つ様になった」。先生は、「もうやめた。！お前を相手にしていたら頭にくるだけだから」と。昭和50年に日本将棋連盟から四段の免状をもらった。

水

婦長さんの声に目を覚ましたのです
夢を見ていました
故郷津軽の草原に遊ぶ夢を
高い熱と衰弱に意識を失ったことも知らず
棺が用意されていることも知らずに
「婦長さん水、お水を下さい喉が渴きました」
コップ一杯の水を息もつかせず飲みました

あれから三十有余年 ようやく知りました 水のやさしさを
水の強さを 水の大切さを

6. 詩話会への入会、キリスト教の受洗、金正美（キム・チョンミ）との出会い

1983（昭和58）年、舎の委員をしていたころ在日女性の詩集出版の手伝

いを小林園長に依頼され、59才で詩話会に入会し初めて詩を作るようになった。詩を作るようになってから社会への目が開かれるようになった。盲人会の職員の詩の朗読を熱心に聞きながら、文学への情熱を取り戻した。また神学を学び、心の糧として、聖書を読み耽るようになったのもこの頃である。社会とのつながりを見てこようと、お金が貯まると外へ出て行くようになった。

1985(昭和60)年、園長がキリスト教の入信を勧めた。「なんでおれ、キリスト教にはいるんだよ?」「黙って入れ」。先生がそう言うんじゃないだろうかと、カトリックの勉強をし61才で洗礼を受けた。洗礼を受けてもいい信者にはならなかった。日曜の礼拝もほとんど行かなかった。「教会に行っても真面目くさってやってられないよ。第一声が出ないんだからから、聖歌を歌うわけでもないし。だから年一回いけばいいほうだ」。

1995(平成7)年、当時恵泉女学園大学の学生だった金正美と出会う。金は大学の掲示板に張られたチラシを見たのがきっかけで、栗生楽泉園を訪問し桜井と出会い、交流を重ねる。彼女は在日三世だった。二人は本当の祖父と孫としての誓いを立てるまでになった。

7. タイに貯水池を二つ造る

桜井はキリスト教に入っても何をしたらいいかわからなかったが、タイのハンセン病コロニーで、貯水池が無いという情報を得て、井戸を掘る資金を送金した。その頃のお金で100万円くらいを出して貯水池を造った。「これは重宝だ。もう一つ造って欲しい」といわれたが、そんなにお金が無かった。それで第一詩集『津軽の子守唄』を出した。何とか第二の貯水池ができ、タイへの旅も実現した。

彼は詩へのとりくみについて金正美に次のように語っている。

「世の中に詩を来ている人はたくさんいて、何も五十過ぎて、今さら俺なんか詩を始めなくたっていいんだけど。俺が書いているんじゃないんだよね。何かに書かされているというか、書かせてくれるというか。俺

は文字で詩を書かない。文字で詩を書いている人はたくさんいるから。俺はね、言葉で詩を書きたい。俺の詩は、たくさんの人が俺にくれた優しい、暖かい、愛がいっぱいの言葉から生まれてくるわけだから」と。

タイの蝶々

旅立ちの朝 寮の庭の空から
風花が白い蝶々のように舞い下りた
蝶々を肩に車に乗った
一九九九年十一月十四日二十三時五十九分
成田空港の長い滑走路に轟音を残して
タイ国へ向かって俺を乗せたジェット機が離陸した

シャム湾に近いハンセン病コロニーを訪ね
タイ東北部の施設と四箇所のコロニーを訪ねた
タイ国の十一月の空には白い蝶々が舞っていた
コロニーを訪ねるたびに迎えてくれたのは鶏だった

四箇所の施設にはかならず保育所があり幼稚園があった
子供たちは元気よく歌い踊ってくれた
子供たちは柔らかい手で俺の頭をさすり禿げた頭をなげた
一緒に賑やかな食事をした

子供たちが朝から作ったという花の首飾りを首から掛けてくれた
名も知らぬ花の匂いに見えない俺の目が潤んだ
女医のカンチャナ先生と一緒にジャックフルーツの苗を二本植えた

五年経つとジャックフルーツの花が咲き実になると言う
ジャックフルーツの花に蝶々が舞う頃
俺は必ず来るからねと子供たちに約束した

賑やかな子供の声に送られて
蝶々の舞うタイの空にさよならをした

8. 「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟

桜井は原告になり、証言台に立った。熊本地裁は、2001（平成13）年5月11日、原告勝訴の判決、5月23日「控訴断念」、翌24日「首相談話」「政府声明」発表。東京地裁は6月12日、原告と被告双方に和解勧告。勝利した時は、議員会館に行っていた。裁判には入所者の反対が多かった。「あの面で園の外に出ないでくれ」なんても言われた。「われわれ弱い者の本当の幸せを実現するように裁判に勝って、正々堂々と、我われだって一人の国民だぞって、言ったっていいんじゃないか、俺はおれで外にでてやろう」と。「らい予防法」は廃止になり療養所は明るくなった。人間としての権利回復が果たされた。だが一人の人間の一生を返してはくれない。「オレは隔離された中で、自分の人間としての尊厳は必死になって守ってきた。時間や空間は奪われたけれど魂の自由までは奪われたとは思っていない。」「あの時はみんな一生懸命だった」。

拭く

一九四一年 昭和十六年十月六日

旅立ちの朝

住み慣れた曲がり屋の門口まで送りに出た父が突然

「利造、勘弁してけれ。家のため辛抱してけれ」と言って

硬く俺の手を握った

見上げた父の顔にひとすじふたすじ涙が走った

後ろを振り向くと おふくろはうつむいて

涙で曇ったのか しきりと眼鏡を拭いていた

青森発大阪行きの列車が弘前駅の一番ホームに入った

ホームは出征兵士や従軍看護婦の見送りで混雑していた
国立療養所「栗生楽泉園」まで送って行くという母を説き伏せ
急いで列車に飛び乗った
おふくろの姿はたちまちホームの人ごみの中に消えた
列車の窓を二度三度と拭いた
見えるはずの岩木山や赤く色づいたりんごは見えなかった

二〇〇一年 平成十三年六月十二日
東京地方裁判所の原告席に支援者に見守られて座った
三人の原告陳述が終わり判決があった
それは五月十一日の熊本裁判の判決に沿う和解であった
裁判所を後に夜遅く帰園した

故郷津軽を離れて六十年
今は亡き両親の涙を 俺は指のない手で静かに拭いている
列車の窓から見えなかった岩木山もりんご園の赤いりんごも
今夜の俺の目には良く見えたよ と もう一度両親の涙を拭いた

9. 韓国へ謝罪の旅

2001年5月27日から6月1日まで韓国へ謝罪の旅に出た。園機関紙『高原』の詩の编者、森田進に頼み、JLM, KLMのお陰でその願いは叶った。妻・真佐子は、鴨緑江水豊ダムの技師をしていた父から、直下水型タービンはドイツ製、50万キロワットとも100万キロワットとも言われた地下発電水豊ダムの堰堤の底には、数千人或いは数万人とも言われた韓国労働者が埋められていることを聞かされていた。「植民地侵略の責めを為政者たちは言葉巧みに笑って誤魔化す／強制従軍慰安婦の傷の痛みには口を噤んでそ知らぬ顔」と記す。ハンセン病回復者の定着村に療友を訪ね、また新羅大学の学生と懇談した。会う人ごとに謝罪した。

* 定着村…韓国のハンセン病者が、自立を目指して作った村。各地にある。

私は侵略者

「侵略者の娘を抱いたあなたは侵略者」

聞きなれない言葉を聞いたのは

結婚して間もない真佐子の口からであった

真佐子に「あなたは侵略者の娘だよ」と言ったのは真佐子の父であった

真佐子の父は水力発電の技師で

真佐子は父と共に全国のダムを巡り歩いた

鴨緑江に水豊ダムを造るため 父は平壤に来ていた

平壤の店先で 父は真佐子にチマチョゴリを買ってくれた

昭和二十八年 二十六歳で真佐子は死んだ

再び「私は侵略者」と日本人の口から聞いたのは

詩の村松武司からであった 村松武司もまた侵略者の子として生まれ
韓国の中学を卒業している

村松武司が死に

村松武司を偲ぶ会が開かれた時には 多くの韓国人が集まった

集まった韓国人達は村松武司に「お前はなぜ死んだ」と言って号泣した

村松武司は言っていた 「私は侵略者、そして韓国人」と

妻の真佐子と村松武司以外に私は日本人の誰からも聞いていない

「私は侵略者」と

私は行こう韓国へ そして韓国人の前で言おう

「私は侵略者」と

そして深く膝を折り謝罪してこよう

私は謝罪のほか何もできないのだから

10. ローマ法王に拝謁

2007(平成19)年2月、教皇様にお会いしたいと言う願いが遂に叶った。「元々たいしたクリスチャンではなかったが、妻もクリスチャンだった。真佐子と真理子、二人の平安を祝福してあげたい」と、長い間思っていた。イエズス会の外川(けがわ)神父に会い、この人ならローマに行って法皇様に会わせてもらえるのでは、話すと「いいよ」と言ってくれた。最初のお願いの書類は、ヨハネ・パウロ二世の時だったが、間もなく昇天され、ベネディクト16世が謁見下さることになる。2007年2月、成田空港からアリタリア航空で外川直見神父、楽泉園を定年退職した准看護婦の赤尾拓子、交友を続けている金正美と一緒にだった。謁見は、毎週水曜日と決まっており、9時頃教皇庁に着いた。正午を過ぎた頃謁見が始まり、「謁見のときは下の段に降りてきて、頭を撫でてくれたんだよ」。世界中から集まった信者は一万人以上になるだろうと神父さんは語っていた。

ローマの空遥か

二月十四日ローマ法王の謁見が許された

謁見の間には十一人の方々がいた

最後が私だという

法王庁つきの浜尾司教の通訳で法皇様との謁見が始まった

日本から来た哲夫・桜井 洗礼名・京都のラザロ

法皇様の手が私の指のない手を包むように優しく握った

金正美は私の写真集『津軽の声が聞こえる』と英語訳した二冊の本を

渡し

正美のNHK出版『しがまっこ溶けた』のエッセイ集を渡し

最後にささやかな献金を渡した

法皇様のお言葉があった

法皇様のお言葉は司教様が解説してくれた 嬉しかった
最後に桜井さんから挨拶をとられた
日本の療友と世界のハンセン病患者の平和の祈りと祝福をお願いした
はっきりとは時間を計ることはできないが長い間お話をしてくれた
そして静かに頭を撫でてくれた 法皇様の手は暖かかった
そして静かに法皇様を見送った
三日間昼の時間は法王庁の建物を案内してくれた
夜は市内にある教会の歌劇のエリアを招待してくれた
とても楽しい夜が続いた
四日間のローマの日程が終わり空港を離れた飛行機の窓から
何度も手を振った

11. 「墮胎児の碑」 建立

2007年、入所者自治会から「墮胎児之碑を作りたい」との話があった。「自分は供養碑を作ってやれないので、こんな嬉しいことはないよ。宜しく頼む」と返事をしたら早速、墮胎児之碑建立の手配をしてくれた。除幕式は厳かに行われ、「私は除幕の紐を握った。その手は激しく震えた」。

除幕式

二〇〇七年 平成十九年三月二十八日
栗生楽泉園において墮胎児の碑
一命カエシテー の除幕式が行われた
当日外部から次の方々の出席を頂いた
群馬県健康福祉局理事 福島金夫
草津町町長 中澤 敬
全国ハンセン病療養所入所者協議会中央執行委員 藤崎睦安
ハンセン病訴訟弁護団代表 杉原信二
式次第は開式の辞 来賓挨拶 謝辞 除幕と行われた

除幕に引き続き 園長はじめ来賓者 自治会長 ご遺族
一般参列者の献花が行われた

真理子が人口搔爬したのは昭和二十六年三月十三日

手にした白い菊に祈りをこめて深く頭を下げた

真理子よ あなたの命を奪ったのは私です 許して下さい

そうだよ 二十六体の親たちを代表して心からごめんなさいと

許しの言葉を捧げたいのです

白い菊の花と一緒に

12. 望郷の詩

ガキ大将

通信簿を渡しながら分教場の先生は言ったものだ

お前は丙隊ばかり並べて大将になるつもりかと

悪童たちは大将だ大将だと囃したてた

俺はそのときから小学校八年間をガキ大将であった

冬はスキーや橇を持ち出しては遊び

春になるとスカンポや虎杖(いたどり)を摘んでは食べた

夏になると近所の畑から茄子や胡瓜を盗んできては水浴びをした

秋になると通草(あけび)や山葡萄や栗を探して駆けまわった

俺のかわいい丙隊を戦争は何人も殺してしまった

俺は四十五年の療養生活をひたすら病氣と闘った

老いたガキ大将の胸に光るのは

鎮守様の宵宮の売店で買った

たった一つのおもちゃの勲章

文字のない木

津軽は北のさいはて津軽は雪国

民謡と伝説の津軽は遠い日のアイヌの故郷

津軽は俺の故郷

アイヌの人達には文字がない

文字を持たないトドロップというアイヌの名を持つ木が
俺の故郷の村にある

村人は四百年も前に津軽藩の依頼により

湿地帯の開田のために移り住んだと言われてきた

トドロップの木はそのとき移り住んだ村人が植えたのか

それとも遠い遠い昔からそこにあったのか誰も知らない

村の子供たちはトドロップの下で遊んだ

村人は朝に夕にトドロップと言葉を交わしながら暮らしてきた

トドロップは

凶作のときは村人と共に腹を空かせ

豊作のときは村人と共に笑い踊る

風の日も雪の日もトドロップは村人と共にあった

俺のおふくろもトドロップのように文字を持たないおふくろであった

文字を持たないおふくろはいつも昔話をしてくれた

文字を持たないおふくろには沢山の言葉があった

文字を持たないトドロップにも沢山の言葉があった

山の療養所から五十年ぶりに故郷へ帰った

五十年ぶりに会ったトドロップには文字があった

「青森県天然記念物トドロップ、トドロップ樅の木」と

大きな木の札がつけられてあった

久しぶりに会った文字のあるトドロップには言葉がなかった

トドロップはアイヌ語で仲間

トドロップは村人の仲間

子供たちの友達

村人はトドロップの仲間
子供たちはトドロップの友達
トドロップに文字はいらない

雪ながれ

山の療養所は今日も 朝から雪が降り続けている
遠い日の旅立ちの朝も 津軽は激しい雪だった
村外れの雪流れを踏み越えて
町の駅までお袋と一緒に細い雪道を歩き続けた
どすの弟は竈返(かまどけし)だと兄に言われ
お袋は雪流れの向こうに握り飯とのしのかを首に結わえ
俺を子猫のように捨てた
寮の軒下で野良猫が一匹鳴いている
猫の声に俺は叫んだ 入ってこい 入ってきて一緒に飲めと
そして猫に言った 俺は家に捨てられた
去年の夏詩人の村松武司が訪ねた北朝鮮には
国に捨てられた日本人妻がたくさんいるのだ
村外れの雪流れは春になると溶ける 日本人妻にいつ春が来るのだ
野良よ遠慮しないで飲んでおくれ
おまえに分かるか どすの弟の詩が
竈返(かまどけし)の詩が 雪は止まぬ

註：雪流れは雪の吹き溜まり、どすはハンセン病
竈返は、財産を無くする者

13. 破戒

桜井は父の戒めを破った。2002年2月14日、NHK総合テレビ(人間ドキュメント)「津軽 故郷の光の中へ」に出演全国放映される。彼は、入所者の中でもハンセン病による後遺症は酷く、29歳で失明、外貌も著しく損

なわれていた。手足の指を失い、眼球も摘出、鼻は崩れ、声も殆ど失われていた。

破 戒

青森県北津軽郡鶴田町妙堂崎

長峰利造 大正十三年七月十日生まれ

父太兵衛 母はる

癩園への旅立ちの朝

顔を歪めて父は言った

たとえ口を裂かれるともこのことだけはけっして言うな

父の戒めを守って四十五年

俺は死んだ人のように口を開かなかった

だが六月二十五日ライを正しく理解する日が来るたびに思うのだ

俺が固く口を閉ざして誰に癩を正しく理解せよというのか

俺は罪によって生まれたのでもなければ悪によって

病人でいるのでもないのだから

父よあの朝あなたは許してくれと言った

そして今私はあなたに許して下さいと言う

すべての人に理解をもとめてあなたの戒めを破るのだから

14. 50年ぶりの帰郷、詩集『鶴田橋賛歌』実名・長峰利造で出版

彼の詩作は、両親のこと、津軽のこと、友のこと、妻子のこと、日々の暮らしの中の出来事から、国際的な活動へとその舞台は広がりを見せていった。2008（平成20）年5月2日、桜井は、人生の大半を隔離された療養所で偽名で過ごしてきたが、親族に勧められ実名で詩集を出版することを決意した。林檎農家に生まれ13歳で発病、桜井哲夫としての人生が始まった。66年ぶりの実名、長峰利造にようやく戻れた。故郷青森に帰郷し、今は亡き両親、兄の墓前に立った。2001年詩を通じ知り合った在日コリア

ン金正美、支援者の赤尾拓子が後押しをしてくれた。ローマの旅を報告し、真佐子、真理子と共に津軽の墓に入れるようにと祈った。

鶴田橋讃歌

鶴田町の岩木川の橋には目がある
鶴田橋には声がある
耳を澄ましてごらん
橋の上を通るとおはようと言う
しっかりと目を開けてごらん
ニコニコ笑って迎えてくれる
桜井哲夫という名は嫌いなのか
一度も声を掛けてくれなかった
親から貰った長峰利造という名で帰ったら
利造、よく帰ってきたなと
ニコニコ笑いながら声を掛けてくれた

15. 長峰利造（桜井哲夫）逝去・鶴田町への帰郷

2011（平成23）年12月28日、長峰利造は国立療養所栗生楽泉園にて、弟夫婦の手厚い看護を受け安らかに逝去、享年87。2012年の正月は70年ぶりに実家で迎えた。17歳で故郷を追われ70年の長い旅を終え、片時も忘れたことのない、彼の魂の原郷、津軽にようやく帰ることが出来た。業病とまで言われた闘病苦、隔離の里で、多くの療友の死を見取り、そして名前、故郷、肉親関係までも奪われ、社会からも大きな差別を受けるという極限の中でも、与えられた運命に逆らわず、孤独と絶望の涙にくれながらも、闇の中から光を求め、己の人生を精一杯生き切った87年の人生だった。

彼の崇高で闊達、ユーモアのある人柄は多くの人々の心の中に今も生きている。まさに哲ちゃんは哲学者だった。今は風になり、光となって、真佐子さん、真理子ちゃんと一緒に、思う存分故郷を楽しんでいることだろ

う。「津軽は俺の故郷 津軽は俺の国 俺は津軽の人」と。この5月、真っ白なりんごの花咲く春、両親の眠るお墓に埋葬された。

2012年2月11日、「詩人桜井哲夫さん追悼ミサ」が、イグナチオ教会(東京)で行われ、全国から150人が参集し、宗派を超えた感動的な追悼式は3時間に及んだと伝えられた。

星の花束

夏の宵の病室に

遙か空の彼方から

星の花束が贈られてきた

花束にはキラキラの星のメッセージがあった

七月十日 傘寿のお誕生日おめでとう

昭和二十八年十二月十三日二十六歳で逝去した妻真佐子

昭和二十六年三月十三日人工搔爬した真理子

真佐子と真理子は星になりました

会いたいときは見上げてごらん夜の星を

そこには母子星が輝いています

人は必ず死にます

死んだ細胞の隙間から命は離れます

離れた命は生きています

いつまでも枯れない星の花束となって

夜の空に咲いています

〈長峰利造（桜井哲夫）略年譜〉

- 大正13年(1924)7月10日 青森県北津軽郡鶴田町妙堂崎に生まれる。
- 昭和6年(1931)6歳 水元村立（現鶴田町）尋常小学校妙堂崎分教場入学。
- 昭和14年(1939)14歳 水元村立尋常小学校高等科卒業。
- 昭和16年(1941)17歳 ハンセン病のため国立療養所栗生楽生園入園。
- 昭和21年(1953)22歳 療養所で知り合った女性真佐子と結婚。
- 昭和26年(1951)27歳 3月13日、妊娠6ヵ月の娘・真理子を失う。
- 昭和28年(1953)29歳 12月13日、白血病で妻真佐子を失う。さらに翌年失明、声帯と指を失う。
- 昭和58年(1983)59歳 栗生詩話会入会、村松武司らから詩の指導を受ける。
- 昭和60年(1985)61歳 カトリックの洗礼を受ける。
- 昭和63年(1988)64歳 第一詩集『津軽の子守唄』を出版。
- 平成3年(1991)67歳 第二詩集『ぎんよう』を出版。
- 平成6年(1994)70歳 第三詩集『無窮花抄』出版。
- 平成7年(1995)71歳 金正美らと詩話会に参加、出会う。
- 平成8年(1996)72歳 2月27日、金正美と「二人の条約」を交わす。4月「らい予防法」廃止。散文集『盲目の王将物語』出版。
- 平成11年(1999)75歳 タイへ出発、ハンセン病コロニーなどを訪問する。
- 平成12年(2000)76歳 第四詩集『タイの蝶々』出版。
- 平成13年(2001)77歳 韓国釜山を訪問、ハンセン病の定着村など訪問する。
- 10月、60年ぶりに帰郷する。帰途十和田湖など周遊する。
- 平成14年(2002)78歳 第五詩集『鶴の家』、『桜井哲夫詩集』出版。
NHK総合テレビ〈人間ドキュメント〉「津軽・

- 故郷の光の中へ」全国放映。
- 平成16年(2004)80歳 写真家鏗山英次と詩・写真集『津軽の音が聞こえる』出版する。7月、80歳の誕生日と出版記念祝賀会が東京で開催。
- 平成17年(2005)81歳 『The Call of Tsugaru』(ウインズ出版)英訳出版、訳者はチャールズ・ウォルフ。朗読会、講演が相次ぐ。
- 平成19年(2007)83歳 前年ローマ法王に詩集を献呈、謁見の機会が与えられベネディクト16世より祝福を受ける。
- 平成23年(2011)12月28日 87歳 国立療養所栗生楽泉園にて逝去。
- 平成23年(2011)12月30日 葬儀委員長・藤田三四郎氏、根津正幸助祭により葬儀、追悼ミサ。
- 平成24年(2012)2月11日 イグナチオ教会「追悼ミサ」司式・外川司祭。
- 平成24年(2012)6月3日 NHK日曜美術館、木下晋「祈りの心」、桜井哲夫を鉛筆による細密描写で描き放映され、全国に大きな反響を呼ぶ。

〈参考資料〉

- ・『風雪の紋』栗生楽泉園患者50年史 栗生楽泉園患者自治会
2000(平成13)年4月1日再版
- ・新・日本現代詩文庫『桜井哲夫詩集』土曜美術社出版販売
2003年1月20日 初版
- ・詩集『鶴田橋賛歌』著者・長峰利造／津軽書房
2008年3月10日発行
- ・「栗生楽泉園・入所者証言集(中)」栗生楽泉園入所者自治会／創土社
2009年8月31日
- ・『しがまっこ溶けた～詩人桜井哲夫との歳月』金正美／NHK出版
2011年8月15日 第4刷発行
- ・「カトリック部落差別人権委員会ニュース」No.138 2012/3

〈資料提供〉

- ・ 社会福祉法人 ふれあい福祉協会

〈取材協力〉

- ・ 栗生楽泉園入所者自治会 会長・藤田三四郎氏
- ・ 青森市一ボランティア 高田明子氏

おじぎ草

夏空を震わせて

白樺の幹に鳴く蝉に

おじぎ草がおじぎする

包帯を巻いた指で

おじぎ草に触れると

おじぎ草がおじぎする

指を奪った「らい」に

指のない手を合わせ

おじぎ草のようにおじぎした

〈補記〉 「詩人の桜井哲夫さん追悼ミサ」

イグナチオ教会 2012.2.11

「カトリック部落差別人権委員会ニュース」より

1. 金正美さん ― 人生で最も大切なことを学びに ―

(桜井哲夫さんがわたしに教えてくれたこと)

― 望郷の思い、孤独と絶望、誰にもいえない思いを、故郷で暮らす文字を読めない母親に語りかけるように口述筆記で綴っていきました。「行間にある思いを大切にしたいの。人と人の隙間を埋めるものは、文字ではなく言葉だから」。文字ではなく言葉で書くことにこだわり、日常会話もまるで美しい詩のようでした。

6畳一間の部屋から外に出なくとも社会とつながり、環境のせいにすることもなく、自分を律して生きていました。その「何も持たない強さ」に感動し、命一つで生きる人間の原点に触れ、魂がゆすぶられる思いがしました。

世間の常識や既成概念にとらわれず自分の意思で人生を切り開いていくこと、観念の呪縛から自分を解き放つこと、美しいものを美しいと認識できる心を 育んでいくこと。大切なことは全て、桜井さんが自分の苦しい体験を通して得た真実の言葉で惜しみなく与えてくれました。―

2. 外川直見神父 ― 桜井哲夫さんとバチカンの旅して ―

(ローマでの哲ちゃんと最後の夜の語らいから)

― 「哲ちゃん、今まで大変な苦勞と差別を受けたんだろうね」「そりゃ苦勞だなんてもものじゃなかったよ。差別だってそりゃひどい差別だった。裁判で勝つのは当たり前だよ。そうじゃないといけない。ひどい差別は本当だけど、差別されたと言いたくないんだ。それにこだわると、差別されてきた俺の人生を受け入れないことになる。差別されたからといって、らいから逃げることはできない。俺の人生はらいという病気に生きた人生だし、俺の詩も信仰もらいの人生から生まれている。らいの人生を否定したら俺

の全てがなくなってしまうんじゃないかな」。ハンセン病に苦しみ、社会から大きな差別を受けながらもそれを受け止め、そこにしっかり人生の土台を置いて、神の祝福を受け止めようとする桜井さんの感性は、いつまでも若く柔らかな感性であった。「福音書にあるでしょ。イエスは死んだラザロの墓の前に立って、『ラザロ立ちなさい』(ヨハネ福音書 11章 43節) と呼びかけたよね。イエスはラザロに起き上がれとittedだけじゃない。ラザロに新しい人生を歩きはじめなさい、新しい使命を引き受けなさいって言われたんだよ。俺の洗礼名は“京都のラザロ”，俺も今、新しい生命に生かされて、教皇様から受けた祝福を療養の仲間たちに伝える新たな旅が始まるんだと思うよ」。80歳を超えた桜井さんにとり、バチカン訪問の旅は、新たな使命を受けた旅の始まりになった。——(イエズス会司祭)